

不登校の未然防止につながる教員の取組に関する研究

—学校生活スキルを育成する実践事例の収集と整理—

心の教育推進課 部長補佐兼課長 横山 恵子

指導主事 福田 裕子

指導主事 津賀尾雄一

キーワード： 不登校 未然防止 学校生活スキル 教員の取組

はじめに

令和6年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(文部科学省, 2025)によると、小・中学校における不登校児童生徒数は353,970人(前年度346,482人)であり、前年度から7,488人(2.2%)増加した。増加率の鈍化がみられたものの、12年連続増加し、過去最多となった。高等学校における不登校生徒数は67,782人(前年度68,770人)であり、前年度から988人(1.4%)減少し、令和2年度以来の減少となった。本県の小・中・高等学校の不登校児童生徒数は、16,634人(前年度17,137人)であり、前年度から503人(2.9%)減少となり、過去10年で初めての減少となった。本県の不登校対策の取組、例えば、不登校児童生徒支援員の配置及び校内サポートルームにおける支援の充実、「心の健康観察」の導入等、様々な取組の一定の効果とも考えられるが、不登校児童生徒数は依然として高い水準にあり、引き続き児童生徒に対する支援の充実が求められる。

不登校の背景には、様々な要因が複雑に関係しており、必要な支援の内容は一人一人異なっている。その中で、「なぜ学校へ行けないかその原因やストレスを見つけてそれらの除去および改善を目指すことよりも、彼らの残された学校との繋がりを発見し、その繋がりを促進強化していくことの重要性」が指摘されており、「ストレスそのものの軽減や除去がたとえうまく行われなくとも、もし学校享受感をある程度体験できるならば、欠席願望は抑制されると考えられる」(本間友巳, 2000)とされている。学校享受感とは、児童生徒が認識している学校生活における楽しさ・期待・好意等のポジティブな感情を指し(古市裕一・玉木弘之, 1994)、様々な学校適応要因と関連する。では、学校享受感を高める、あるいは学校適応を促進するために、どのような取組が考えられるであろうか。

飯田順子・石隈利紀(2002)は、「学校生活スキル」という概念を提示し、山口豊一・奥田奈津子(2017)は、「学校生活スキルを高めることは、学校における居場所感を促進し、学校適応感を高める」ことを示唆している。そこで、本研究では、不登校の未然防止に向けて、児童生徒の学校生活スキルを育成するための取組を教員から収集し、整理して示すことを目的とした。

1 先行研究から—学校生活スキルと不登校との関係—

先行研究から、学校生活スキルの内容を示す学校生活スキル尺度について、また学校生活スキルと不登校との関係について整理する。

(1) 学校生活スキル尺度とは

学校生活スキルとは、「学校生活を送る上で出会うことが予測される、発達しつつある個人として出会う課題である発達課題と学校というコミュニティの中で生活する者として出会う課題である教育課題に対処する際に役立つスキル」であり、「①学習される、②学習面、

社会面、進路面、健康面の領域で抱える発達課題・教育課題の解決を促進する、③学校適応において個人の目標達成に有効である、④学校という場面で受容される、⑤学校で教育できる」行動であるとされている（飯田・石隈, 2002）。飯田・石隈（2002）は、不登校の増加や犯罪の増加・低年齢化等、児童生徒に関わる問題傾向の増加から、全ての児童生徒を対象とした、一般の発達過程に起こりうる問題への対処能力の向上を援助する予防的・発達促進的援助の充実が必須であると述べている。つまり、現在の「生徒指導提要」（文部科学省, 2022）でいう発達支持的生徒指導である。そして、そのような援助を「何に焦点を当てて提供していくのか」という問いに対する一提案として、中学生における学校生活スキルの収集・選定を行い、学校生活スキルの個人差を測定するための尺度（学校生活スキル尺度（中学生版））を作成した。同様に、山口・飯田・石隈（2004）では高校生版、山口・飯田・石隈（2005）では小学生版の学校生活スキル尺度の作成を行っている。また、飯田・石隈（2002）の学校生活スキル尺度を参考にして、茨城県教育研修センター（2004）が小学校 49 項目、中学校 51 項目、高等学校 49 項目から成る学校生活スキル尺度を作成している。本研究で用いた学校生活スキル尺度は、この茨城県教育研修センター版である。

表 1 茨城県教育研修センター版学校生活スキル項目の分類

小学生版 (49項目)	中学生版 (51項目)	高校生版 (49項目)
・将来について考えるスキル（進路決定スキル）（12）	・進路決定スキル（12）	・進路決定スキル（14）
・集団で生活するスキル（集団活動スキル）（8）	・集団活動スキル（8）	・集団活動スキル（6）
・健康について相談するスキル（健康相談スキル）（4）		
・健康に気をつけるスキル（健康維持スキル）（4）	・健康維持スキル（8）	・健康維持スキル（6）
・勉強を自分ですすめていくスキル（自己学習スキル）（5）	・自己学習スキル（8）	・自己学習スキル（10）
・課題に取り組むスキル（課題遂行スキル）（7）		
・友だちとかかわるスキル（コミュニケーションスキル）（9）	・コミュニケーションスキル（7）	・コミュニケーションスキル（13）
	・相談スキル（8）	

（数字は選定されたスキルの項目数）

(2) 学校生活スキルと不登校との関係

五十嵐哲也（2011）は、中学校進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連について、不登校傾向尺度と前述の学校生活スキル尺度を用いて調査を行っている。その結果、小学校段階では、学習に関する（自己学習・課題遂行）スキル不足が「休養を望む不登校傾向」「遊びを望む不登校傾向」の増大と関連し、「休養を望む不登校傾向」はコミュニケーションスキル、「遊びを望む不登校傾向」は集団活動や健康関連（健康相談・健康維持）のスキルが関与していると指摘している。また、中学校段階では、学習（自己学習）、健康維持のスキルが全ての不登校傾向（別室登校を希望する不登校傾向、遊び・非行に関連する不登校傾向、精神・身体症状を伴う不登校傾向、在宅を希望する不登校傾向）と関連し、中学進学に伴う変化については、中学校での学習や健康維持のスキルが関与していた。また、「別室登校を希望する不登校傾向」増加には集団活動スキルが、「遊び・非行に関連する不登校傾向」増加には進路決定スキルが、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」増加にはコミュニケーションスキルが関与し、「在宅を希望する不登校傾向」が増加した者には、中学校段階でのあらゆる学校生活スキルの低さが認められた。以上のことから、不登校傾向の特徴に応じた学校生活スキルが高まることと、その不登校傾向の低減とは関係があると指摘している。

また、飯田・石隈（2016）は、学校生活スキルの学校適応への影響について、各学校生活スキルが、対応する学校適応に正の影響を及ぼしていたことから、一次的援助サービス（全ての児童生徒を対象とし、一般の発達過程に起こりうる問題への対処能力の向上を援助する予防的・発達促進的援助サービス）として学校生活スキルの各領域に焦点を当てたスキルトレーニングを実施することが、対応する学校適応の促進に有効であるとしている。ただし、学校生活スキルの向上が不登校傾向を低減するということを明確に実証するためには、学校生活スキルを高める働き掛けの効果検証が課題となる（飯田・石隈, 2016）。そこで、本研究ではその効果検証に向けて、学校現場における学校生活スキルを育むための取組を収集し、実践場面をイメージできるよう整理して示すことを目的に、アンケート調査を実施することとした。

2 中堅教諭等資質向上研修受講者へのアンケート調査の方法

(1) 調査時期及び協力者

中堅教諭等資質向上研修受講者に、アンケート調査への協力を依頼した。アンケート依頼文は、当総合教育センターで開催された共通研修（小・中学校：令和7年8月25・26日、高等学校：令和7年9月12・16日）で配布した。

(2) 調査内容

小・中・高等学校教員それぞれに以下表2～4に示す学校生活スキルを育成するための具体的な取組について、「児童（生徒）の学校生活スキルを育むために、どのような取組をされていますか。御自身の取組の中で、以下の学校生活スキルを育むことにつながっていると考えられるものがあれば、具体的に記入してください。全ての項目でなくても構いません」という設問を提示し、記述式で回答を求めた。

表2 学校生活スキルを育成するための具体的な取組についての質問（小学校）

I	進路決定スキル（興味のある職業等を調べることができる、自分の現在の行動等が将来に影響することがわかる等）を育む取組の具体	（将来について考えるスキル）
II	集団活動スキル（相手の立場に立って考えることができる、人や自分の失敗を許すことができる等）を育む取組の具体	（集団で生活するスキル）
III	自己学習スキル（苦手な教科の勉強に時間をかけて取り組むことができる、宿題等以外で自分で探して勉強することができる等）を育む取組の具体	（勉強を自分ですすめていくスキル）
IV	課題遂行スキル（係や当番等の決められた仕事を行うことができる、自分のプリントの整理をきちんとできる等）を育む取組の具体	（課題に取り組むスキル）
V	健康相談スキル（からだの調子がおかしいとき大人に相談できる、からだの変化からくる悩みについて誰かに相談できる等）を育む取組の具体	（健康について相談するスキル）
VI	コミュニケーションスキル（あいさつができる、苦手な友だちとも付き合うことができる等）を育む取組の具体	（友だちと関わるスキル）
VII	健康維持スキル（疲れを感じたらしっかりと休むことができる、睡眠時間に気を付けることができる等）を育む取組の具体	（健康に気を付けるスキル）

表3 学校生活スキルを育成するための具体的な取組についての質問（中学校）

I	進路決定スキル（進路について複数の情報を比べたり検討したりすることができる、将来何がしたいのか考えることができる等）を育む取組の具体
II	相談スキル（自分の知りたいことを聞くことができる、人間関係について相談できる等）を育む取組の具体
III	集団活動スキル（グループで協力して活動できる、相手の立場に立って考えてみるすることができる等）を育む取組の具体
IV	健康維持スキル（からだの異常を大人に相談できる、すすんで自分にあった運動をすることができる等）を育む取組の具体
V	自己学習スキル（宿題などやるべきことはできる、宿題など以外で自分で探して勉強することができる等）を育む取組の具体
VI	コミュニケーションスキル（自分の意見や考えを表現することができる、友だちの話を相手の身になって聞くことができる等）を育む取組の具体

表4 学校生活スキルを育成するための具体的な取組についての質問（高等学校）

I	コミュニケーションスキル（人との会話の中で話を広げていくことができる、友だちとの関係から自分の個性や長所に気付くことができる等）を育む取組の具体
II	進路決定スキル（いろいろな情報を集めて新しい考えを生み出すことができる、自分がなりたいものに向いているものの違いについて考えることができる等）を育む取組の具体
III	自己学習スキル（自分の目標に照らして課題を持って学習に取り組むことができる、わからないことがあったら先生や友だちに聞くことができる等）を育む取組の具体
IV	集団活動スキル（違反行為を思いとどまることができる、間違いがあった時に素直に謝ることができる等）を育む取組の具体
V	健康維持スキル（からだの異常を大人に相談できる、睡眠時間に気を付けることができる等）を育む取組の具体

(3) 倫理的配慮

倫理的配慮として、アンケート調査協力の依頼文及びアンケート冒頭において、以下3点を示した上で実施した。

- ・本調査で得られた情報は研究目的以外に使用しないこと
- ・個人や学校が特定されることのないように管理すること
- ・途中で回答をやめても不利益はないこと

(4) 分析方法

得られた回答をスキルごとに整理した。1つの回答に2つの事例が含まれている場合は分割し、類似した事例はまとめて「興味のある職業について調べさせる」等、教員の取組として、教員を主語とした名称を付した。そして、類似した取組を「情報を提供する」「より良い集団の在り方を考えさせる」「提出課題を自己管理させる」等の小カテゴリーとして分類した。1,631の事例が収集され、類似した事例を918の取組にまとめ、そこから235の小カテゴリーが生成された。さらに、それら小カテゴリーから「伝える」「考えさせる」「体験させる」「価値付ける」「その他」という5つの大カテゴリー（表5）を生成した。以下、大カテゴリーは「」で、小カテゴリーは〔〕で示す。

表5 大カテゴリーの分類表

カテゴリー名	カテゴリーの説明
伝える	教員が児童生徒に対して紹介、説明、指導等を行う取組
考えさせる	児童生徒にある事柄について考えさせる取組
体験させる	教員が児童生徒に体験させることを意図して設定された取組
価値付ける	児童生徒の言動等について褒める、認め合う等の価値付けを行う取組
その他	上記4つの大カテゴリーに分類し難い取組

3 調査結果

小学校教員 273 名、中学校教員 119 名、高等学校教員 232 名にアンケートの依頼を配布し、回答者数（回答率）は小学校教員 132 名（48.4%）、中学校教員 54 名（45.4%）、高等学校教員 103 名（44.4%）となった。

(1) 学校生活スキルごとの回答者数

校種別の学校生活スキルごとの回答者数を以下表6～8に示す。

表6 回答者数（小学校）

回答者数：132名	
I	進路決定スキル 110名
II	集団活動スキル 97名
III	自己学習スキル 101名
IV	課題遂行スキル 84名
V	健康相談スキル 56名
VI	コミュニケーションスキル 94名
VII	健康維持スキル 59名

表7 回答者数（中学校）

回答者数：54名	
I	進路決定スキル 40名
II	相談スキル 43名
III	集団活動スキル 38名
IV	健康維持スキル 26名
V	自己学習スキル 33名
VI	コミュニケーションスキル 29名

表8 回答者数（高等学校）

回答者数：103名	
I	コミュニケーションスキル 93名
II	進路決定スキル 84名
III	自己学習スキル 80名
IV	集団活動スキル 80名
V	健康維持スキル 77名

スキルごとの回答者数が最も少ないのは全校種共通して健康に関するスキル（健康維持スキル（小：44.7%、中：48.1%、高：74.8%）、健康相談スキル（小：42.4%））であった。最も回答者数が多いスキルは校種ごとに異なり、小学校では進路決定スキル（83.3%）、中学校では相談スキル（79.6%）、高等学校ではコミュニケーションスキル（90.3%）であった。

(2) 学校生活スキルを育む取組の校種別事例数

各学校生活スキルを育む取組の大カテゴリーごとの事例数と割合を校種別に示す。1つの回答に複数の事例が含まれている場合は、分割して事例数を集計し、その割合を算出した。（表9～11）。

表9 小学校における各学校生活スキルを育む取組の事例数と割合

大カテゴリー	事例数（スキルごとの合計事例数に対する割合 [%]）					スキルごとの合計事例数	全体数に対する割合 [%]
	伝える	考えさせる	体験させる	価値付ける	その他		
学校生活スキル							
I 進路決定スキル	17 (10.4)	87 (53.0)	58 (35.4)	2 (1.2)	0 (0.0)	164	20.1
II 集団活動スキル	18 (12.9)	84 (60.0)	33 (23.6)	5 (3.6)	0 (0.0)	140	17.2
III 自己学習スキル	26 (18.3)	49 (34.5)	57 (40.1)	10 (7.0)	0 (0.0)	142	17.4
IV 課題遂行スキル	17 (16.5)	27 (26.2)	50 (48.5)	9 (8.7)	0 (0.0)	103	12.7
V 健康相談スキル	18 (26.5)	4 (5.9)	40 (58.8)	2 (2.9)	4 (5.9)	68	8.4
VI コミュニケーションスキル	3 (2.4)	15 (11.8)	99 (78.0)	6 (4.7)	4 (3.1)	127	15.6
VII 健康維持スキル	16 (22.9)	18 (25.7)	30 (42.9)	2 (2.9)	4 (5.7)	70	8.6
大カテゴリーごとの合計事例数	115	284	367	36	12	814	100
全体数に対する割合 [%]	14.1	34.9	45.1	4.4	1.5	100	

小学校における大カテゴリー別の事例数の割合（表9）を比較したところ、「体験させる」取組が45.1%と最も高く、次いで「考えさせる」取組が34.9%であった。特に、コミュニケーションスキル及び健康相談スキルでは「体験させる」取組の割合、集団活動スキル及び進路決定スキルでは「考えさせる」取組の割合が高かった。また、「伝える」取組については、健康相談スキル及び健康維持スキルにおいて、他のスキルと比較して割合が高くなっていた。「価値付ける」取組は、自己学習スキル、課題遂行スキルで比較的多く収集された。

表10 中学校における各学校生活スキルを育む取組の事例数と割合

大カテゴリー	事例数（スキルごとの合計事例数に対する割合 [%]）					スキルごとの合計事例数	全体数に対する割合 [%]
	伝える	考えさせる	体験させる	価値付ける	その他		
学校生活スキル							
I 進路決定スキル	9 (14.3)	23 (36.5)	30 (47.6)	0 (0.0)	1 (1.6)	63	22.2
II 相談スキル	6 (11.3)	1 (2.0)	42 (79.2)	1 (1.9)	3 (5.7)	53	18.7
III 集団活動スキル	5 (9.6)	26 (50.0)	19 (36.5)	2 (3.8)	0 (0.0)	52	18.3
IV 健康維持スキル	14 (43.8)	2 (6.3)	15 (46.9)	0 (0.0)	1 (3.1)	32	11.3
V 自己学習スキル	9 (18.0)	26 (52.0)	8 (16.0)	6 (12.0)	1 (2.0)	50	17.6
VI コミュニケーションスキル	10 (29.4)	2 (5.9)	22 (64.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	34	12.0
大カテゴリーごとの合計事例数	53	80	136	9	6	284	100
全体数に対する割合 [%]	18.7	28.2	47.9	3.2	2.1	100	

中学校における大カテゴリー別の事例数の割合（表10）を比較したところ、「体験させる」取組が47.9%と最も高く、次いで「考えさせる」取組が28.2%であった。特に、相談スキル及びコミュニケーションスキルでは「体験させる」取組の割合、自己学習スキル及び集団活動スキルでは「考えさせる」取組の割合が高かった。「伝える」取組については、回答者数・事例数が少なかった健康維持・コミュニケーションスキルにおいて比較的高い割合を示した。「価値付ける」取組は、自己学習スキルで比較的多く収集された。

表11 高等学校における各学校生活スキルを育む取組の事例数と割合

大カテゴリー	事例数（スキルごとの合計事例数に対する割合 [%]）					スキルごとの合計事例数	全体数に対する割合 [%]
	伝える	考えさせる	体験させる	価値付ける	その他		
学校生活スキル							
I コミュニケーションスキル	14 (10.1)	3 (2.2)	118 (85.5)	3 (2.2)	0 (0.0)	138	25.9
II 進路決定スキル	34 (30.1)	37 (32.7)	35 (31.0)	2 (1.8)	5 (4.4)	113	21.2
III 自己学習スキル	19 (21.8)	37 (42.5)	28 (32.2)	2 (2.3)	1 (1.2)	87	16.3
IV 集団活動スキル	64 (65.3)	27 (27.6)	5 (5.1)	2 (2.0)	0 (0.0)	98	18.4
V 健康維持スキル	52 (53.6)	2 (2.1)	28 (28.9)	0 (0.0)	15 (15.5)	97	18.2
大カテゴリーごとの合計事例数	183	106	214	9	21	533	100
全体数に対する割合 [%]	34.3	19.9	40.2	1.7	3.9	100	

高等学校における大カテゴリー別の事例数の割合（表11）を比較したところ、「体験させる」取組が40.2%と最も高く、次いで「伝える」取組が34.3%であった。特に、コミュニケーションスキルでは「体験させる」取組の割合が高く、同様に集団活動スキル及び健康

維持スキルでは「伝える」取組の割合、自己学習スキルでは「考えさせる」取組の割合が高かった。「価値付ける」取組の割合は、小・中学校に比べて低くなった。

(3) 学校生活スキルを育む具体的取組内容

収集された学校生活スキルを育むための取組の具体を、スキルごとに大カテゴリー、小カテゴリーで分類して末尾の表 12～29 示す。表には、大カテゴリー、小カテゴリー、具体的な取組に加えて、考えられる取組の実施機会を記載した。

取組の実施機会については、①日常(授業や行事以外に行われる日常的な指導等の取組)、②学習活動(授業、学級活動等における取組)、③学校行事(文化祭、体育大会、修学旅行、講演会等における取組)、④課外活動(部活動、放課後の補習等の課外における取組)の4つの場面を想定し、取組の実施が考えられる機会に○を付けている。ここで日常の関わりや学習活動とは別に学校行事を項目の1つとして取り上げているのは、集団活動スキルやコミュニケーションスキルを育む取組として、学校行事の際の取組を記述する教員が多かったためである。また、「その他」については、他4つのカテゴリーに分類し難く、例えば、保護者への働きかけや他の教員との連携といった直接的に児童生徒に学校生活スキルを育む取組ではないものを分類した。

ア 実施機会の特徴(表 12～29)

全校種共通して、学校生活スキルの実施機会は、日常または学習活動としての取組が主であった。スキルごとでは、進路決定スキルは学習活動としての取組、健康維持スキル・健康相談スキルは日常での取組が主であった。集団活動スキル・コミュニケーションスキルは、全校種様々な機会での実施が考えられた。その中で、集団活動スキルについては、小・中学校では学習活動の取組、高等学校では日常の取組、コミュニケーションスキルについては高等学校では学校行事の取組が多く収集された。

イ 進路決定スキル(表 12、19、26)

進路決定スキルを育む取組について大カテゴリー別の事例数の割合をみると、小学校(表 9)では「考えさせる」取組(53.0%)が最も高く、「体験させる」取組(35.4%)が続いた。中学校(表 10)では「体験させる」取組(47.6%)が高く、「考えさせる」取組(36.5%)がこれに続き、高等学校(表 11)では「考えさせる」取組(32.7%)と「体験させる」取組(31.0%)がほぼ同程度であった。進路決定スキルは、「個性に応じて将来の進路を選択する能力を養う」「将来の進路を決定させる」という学校教育の目標に照らしていずれの校種でも関心が高いスキルであると考えられる。小カテゴリーの取組内容には校種間の特徴がみられた。「考えさせる」取組では、小学校では〔働くことについて考えさせる〕〔身近な人への思いを考えさせる〕〔現在と未来のつながりに気付かせる〕等、将来を広く捉えさせる取組が中心であった。中学校では〔進路選択に必要な要素を考えさせる〕取組、高等学校では〔目標を明確にさせる〕〔比較・検討させる〕取組といった、小学校より具体的に進路を考えさせる取組が多くみられた。「体験させる」取組では、小学校では職業体験をさせる等の〔仕事を体験させる〕取組、中学校ではものづくり大学校等を活用した〔ものづくりを体験させる〕取組がみられた。一方、高等学校では「伝える」取組が30.1%と他校種より高く、〔進路情報を提供する〕〔進路選択を意識させる〕取組が多くみられ、大学進学や就職に必要な情報を必要な時期に伝える取組が整理された。

ウ 自己学習スキル(表 14、23、27)

自己学習スキルを育む取組について大カテゴリー別の事例数の割合をみると、小学校(表 9)では「体験させる」取組(40.1%)と「考えさせる」取組(34.5%)が高く、中学校(表

10) では「考えさせる」取組 (52.0%) が高かった。高等学校 (表 11) では「考えさせる」取組 (42.5%) と「体験させる」取組 (32.2%) が高かったものの、自己学習スキルは最も事例数が少ないスキルであった。具体的な取組内容を小カテゴリーでみると、「体験させる」取組として、小学校では教員主導で自主学習ノート等に取り組ませる〔自主学習させる〕取組、高等学校では「ロイロノート・スクール®」を活用して随時質問を受け付ける〔分からないところを質問させる〕取組がみられた。「考えさせる」取組では、小学校では自主学習内容について話し合いを行わせる〔何について学習するか考えさせる〕取組、中学校ではテスト勉強計画の作成や振り返りを行わせる〔学習計画を立てさせる〕〔取組について振り返らせる〕取組、高等学校では将来像を踏まえて必要な学習内容や課題を考えさせる〔学習の目標を設定させる〕取組がみられた。

エ 集団活動スキル (表 13、21、28)

集団活動スキルを育む取組について大カテゴリー別の事例数の割合をみると、小学校 (表 9) では「考えさせる」取組 (60.0%) と「体験させる」取組 (23.6%) の順で高く、中学校 (表 10) でも「考えさせる」取組 (50.0%) と「体験させる」取組 (36.5%) が高かった。高等学校 (表 11) では「伝える」取組 (65.3%) が最も高く、「考えさせる」取組 (27.6%) が続いた。取組内容を小カテゴリーでみると、「考えさせる」取組では、小学校で当番活動を通した〔失敗から学ばせる〕取組、〔相手の立場に立って気持ちを考えさせる〕取組、集団活動で自分や友達が失敗したときに〔自分をコントロールさせる〕取組がみられた。中学校では、〔困った時の対応を考えさせる〕取組が特徴的であった。高等学校では、校則やルールの意味を考えさせる〔集団のルールについて考えさせる〕取組がみられた。「体験させる」取組では、小学校で縦割り班活動等の〔異年齢集団で活動させる〕取組があり、中学校では他者と協力するワークショップを通した〔集団での活動に役立つスキルを学ばせる〕取組が多かった。高等学校では、〔より良い集団の雰囲気をつくる〕取組が他校種より多く得られた。「伝える」取組では、高等学校は全校種・全スキルの中で事例数が最も多く、特に違反行為の背景や望ましい行動をクラス全体に示す〔集団における望ましい行動を教える〕取組が多かった。

オ 健康維持スキル (表 18、22、29)

健康維持スキルを育む取組は、中学校 (表 10) で最も事例数が少なく、小学校 (表 9) ・高等学校 (表 11) でも 2 番目に少なかった。大カテゴリー別の割合をみると、小学校では「体験させる」取組 (42.9%) と「考えさせる」取組 (25.7%) の順で高く、中学校では「体験させる」取組 (46.9%) と「伝える」取組 (43.8%) が高かった。高等学校では「伝える」取組 (53.6%) と「体験させる」取組 (28.9%) の順で高くなっていた。取組内容を小カテゴリーでみると、「考えさせる」取組では、小学校では、自身の生活リズムを振り返らせる〔振り返りをさせる〕取組や、健康観察の時間に体調について考えさせる〔自分の健康・安全について考えさせる〕取組が得られた。一方、中学校・高等学校では該当事例がいずれも 2 件と少なかった。「伝える」取組では、小学校で、早寝早起き等健康維持に必要な事項を伝える〔健康維持の方法を教える〕取組が多かった。中学校・高等学校では、定期的な健康に関する講演会や、欠席が増えた際の注意喚起等〔健康への意識を高める〕取組が多くみられた。「体験させる」取組では、小学校で月ごとに生活習慣をチェックさせる〔生活習慣チェックをさせる〕取組があり、中学校では心の健康チェックを用いた〔自分の状態を把握させる〕取組が得られた。高等学校では、日頃から声掛けを行い、不調を相談しやすい環境を整える〔相談する経験をさせる〕取組が多かった。

カ コミュニケーションスキル（表 17、24、25）

コミュニケーションスキルを育む取組について大カテゴリー別の事例数の割合をみると、どの校種も「体験させる」取組が高く、小学校（表 9）では 78.0%、中学校（表 10）では 64.7%、高等学校（表 11）では 85.5%であった。特に高等学校では 118 事例が収集され、全校種・全スキルの中で「体験させる」取組の事例数及び割合が最も高かった。取組内容を小カテゴリーでみると、小学校で、あいさつを徹底させる〔話す経験をさせる〕取組、共同制作等の〔グループで話し合いをさせる〕取組、友人の良いところを伝え合う〔リレーションを形成させる〕取組がみられた。中学校では、アイスブレイクを行う等の〔話す経験をさせる〕取組、座席配置を変えて多様な生徒同士が関われる場をつくる〔リレーションを形成させる〕取組のほか、対人関係に関する特別授業等の〔スキルを学ばせる〕取組が得られた。高等学校では、教員が積極的に声掛けを行い話しやすい環境を整える〔話す経験をさせる〕取組、グループワークを取り入れる〔グループで話し合いをさせる〕取組、意見を発表する機会を多く設ける〔考えを表現させる〕取組が多くみられた。

キ 健康相談スキル〈小学校〉・相談スキル〈中学校〉（表 16、20）

大カテゴリー別の事例数の割合をみると、健康相談スキル〈小学校〉（表 9）では「体験させる」取組（58.8%）、相談スキル〈中学校〉（表 10）でも「体験させる」取組（79.2%）と、いずれのスキルにおいても「体験させる」取組の割合が最も高い点の特徴であった。取組内容を小カテゴリーでみると、健康相談スキル〈小学校〉では、タブレットを用いて体調や心の状態を入力させて相談の必要性に気付かせるための〔自分の状態を把握させる〕取組や、表情カードを活用して状態を伝えさせる〔自分の状態を助けを借りて表現させる〕取組が多くみられた。相談スキル〈中学校〉では、教育相談の実施や、スクールカウンセラーとの連携によるカウンセリング体験等〔相談する体験をさせる〕取組が多く得られた。

ク 課題遂行スキル〈小学校〉（表 15）

課題遂行スキルについて大カテゴリー別の割合（表 9）をみると、「体験させる」取組（48.5%）が最も高く、「考えさせる」取組（26.2%）が続いた。取組内容を小カテゴリーでみると、「体験させる」取組では、お楽しみ会の企画・運営を行わせる〔自主的・主体的な活動をさせる〕取組や、その日に行うべき仕事を朝からメモさせる〔自分の仕事を管理させる〕取組が多くみられた。「考えさせる」取組では、宿題の実施期限を自分で決めさせる〔計画を立てさせる〕取組や、自身の役割について振り返らせる〔取組について振り返りをさせる〕取組が多くみられた。

4 考察

(1) 校種別の小カテゴリーからみえる学校生活スキルを育む取組の特徴

本研究において収集された取組を学校生活スキルごとに分類・整理した結果、小カテゴリーから以下のような特徴が見出された。

ア 小学校：学校生活の土台作りになる取組

小学校では、自己学習スキルの〔自主学習させる〕取組が他校種と比較して数多く収集されたほか、集団活動スキルの〔自分をコントロールさせる〕取組や〔相手の立場に立って気持ちを考えさせる〕取組のような他校種にはない取組が収集された点に特徴がみられた。これは、小学校において学校生活を送る上での基本的なルールや学習習慣の定着に向けた取組がなされていることを反映していると考えられる。同様に進路決定スキルでは、児童自身が幅広く将来について考えたり関心を広げたりする〔働くことについて考えさせ

る] 取組等、中学校・高等学校での具体的な進路選択の土台となる取組がなされていると推察できる。

イ 中学校：社会的自立に向けた実践的な取組

中学校では、進路決定スキルの〔進路選択に必要な要素を考えさせる〕取組、集団活動スキルの〔集団での活動に役立つスキルを学ばせる〕取組が他校種と比較して多く収集されたり、集団活動スキルの〔困った時の対応を考えさせる〕取組のような他校種にはない取組が収集されたりした点に特徴がみられた。これらから、集団生活の中での望ましい言動や進路選択に向けて必要な行動を自分自身で考え、実践することをめざした、社会的自立を促すための取組がなされていると推察される。

ウ 高等学校：自立した個人として社会集団で生活していく能力を育む取組

高等学校では、集団生活スキルにおいて〔より良い集団の雰囲気をつくる〕取組が他校種にない取組であり、〔集団における望ましい行動を教える〕取組も他校種と比較して多く収集され、より良い集団を形成する力の育成に重点を置いていることがうかがえた。一方で、進路決定スキルにおいては、〔比較・検討させる〕取組が他校種にない取組であり、自主学习スキルの〔学習の目標を設定させる〕取組、コミュニケーションスキルの〔考えを表現させる〕〔話す経験をさせる〕取組が他校種と比較して多く収集され、個人としての意思決定や考えを表現する力を重視していると思われる。自立した個人として、より良い社会集団で生活していくための能力を育成する取組がなされていることが推察される。

エ 発達段階に応じた校種間の連続性

全校種に共通した小カテゴリー、例えば、自己学習スキルの〔学習の目標を設定させる〕取組をみると、小学校では〔何のために学習するのか考えさせる〕、中学校では〔どのような自主学习ノートにするか目標を立てさせる〕、高等学校では〔将来像に向けて自分に必要なことや課題を書かせる〕等の取組が得られており、上記ア～ウでも述べたような発達段階ごとの到達点の違いが表れていると考えられる。併せて小・中・高等学校と段階を踏んでスキルを育成する取組が行われていることも推察された。

(2) 取組指導としての構造的特徴

それぞれの校種において得られた小カテゴリーからは、校種に共通の「伝える」「考えさせる」「体験させる」「価値付ける」「その他」の大カテゴリーが生成された。スキルによってそれぞれの大カテゴリーに分類される取組数に偏りがあり、そのことがスキルによる実施機会の傾向の違いに反映されていると思われる。全体的な傾向として、全校種で最も割合が高かったのは「体験させる」取組であり、学校生活スキルの育成において体験が重視されていることが示された。「体験させる」取組の次に割合が高いのは、小・中学校では「考えさせる」取組、高等学校では「伝える」取組であった。発達段階や校種による指導方法の傾向の違いがうかがえるものの、いずれの校種、いずれの学校生活スキルにおいても、「伝える」「考えさせる」「体験させる」「価値付ける」取組が収集されたことは、ソーシャルスキル（人間関係に関する知識や具体的な技術やコツ）の指導方法を想起させる。ソーシャルスキル指導の方法として、①言語的教示、②モデリング、③リハーサル、④フィードバック、⑤定着化がある（石川芳子, 2008）。①基本的な心構えや具体的な振る舞い方、社会的なルール等を示し、スキルを学ぶ意義を教え、動機を高める、②具体的なモデルを示して観察、模倣させて学ばせる、③①や②で示した適切なスキルを、頭の中や実際の行動の中で改善を加えながら反復させる、④児童生徒の行動を褒めたり修正を加えたりして動機を高める、⑤日常場面での実践を促すために、言語的教示や課題を与えるといった方

法であり、一般的には①～⑤の順で実施するが、互いに補完的關係にあるので、この順序にとられる必要はないとされている（石川, 2008）。今回収集された取組においても、教示や体験（「伝える」「考えさせる」）を通じて動機を高めてスキルを学ばせ、児童生徒自ら考え実践を重ねる（「考えさせる」「体験させる」）取組を通じてスキルを身に付けさせ、フィードバック（「価値付ける」「考えさせる」）により児童生徒の自己効力感を高め、スキルの定着に向けた次の実践への動機を持たせていると思われる。このような取組を実践することは、学校生活スキルの向上に寄与すると考えられる。

(3) 実践例

各校種で特徴的であった取組をそれぞれ1つ取り上げ、動機付け、実践、定着の視点で、学校でどのように取り組むことが想定されるか検討し、示すこととする。

ア 小学校の実践例：学習の質の向上を図る「自主学習ノート」の取組

学校生活スキル	自己学習スキル	
カテゴリー	大カテゴリー：「考えさせる」	小カテゴリー：〔何について学習するか考えさせる〕
取組	自主学習ノートの取組について話し合いをさせる	

小学校では、自己学習スキルを育成するための自主学習ノートに関する取組を示す。これは、自主学習ノートの取組が既に行われている状況において、児童の自主学習の定着や質的向上を図る取組である。互いの自主学習ノートを見て他者の良い点を積極的に取り入れるよう促したり、自主学習ノートの取組を開始したばかりの場合には、見本としてノートのコピーを一律に配布し、全員で同じ例を基に話し合わせたりする。そして、児童の自主学習ノートの取組に工夫や改善があった場合に児童同士で認め合ったり、教員が価値付けたりすることが考えられる。

イ 中学校の実践例：体験を通したコミュニケーショントレーニングの取組

学校生活スキル	コミュニケーションスキル	
カテゴリー	大カテゴリー：「体験させる」	小カテゴリー：〔スキルを学ばせる〕
取組	コミュニケーショントレーニングを実施する	

中学校では、体験を通して実践的なコミュニケーションスキルを育む取組を示す。これは、コミュニケーショントレーニングの時間を設定したうえで、学んだことを実践させる取組である。教員は、改まってコミュニケーションの技法を生徒に教えることは少なく、その時々状況に応じてコミュニケーションに関する指導を行っているものと推察する。コミュニケーションの技法に焦点を当てた授業を行った上で、授業等のグループ活動で反復させることでスキルを身に付けさせる取組である。

ウ 高等学校の実践例：規範意識の醸成と自立を促す事後指導の取組

学校生活スキル	集団活動スキル	
カテゴリー	大カテゴリー：「伝える」	小カテゴリー：〔集団における望ましい行動を教える〕
取組	違反した生徒の考えを尊重しつつ行動面について何がよくなかったか説明する	

高等学校では、自立した個人としての集団における望ましい行動に向けた、動機付けのための取組を示す。集団生活の規律等への違反に対する事後指導として、まずは丁寧に生徒の話に傾聴した上で事実に対する指導を行う。教員が一方的に教え込むのではなく、生徒に寄り添い、一緒に考えるという姿勢で指導に当たることで、望ましい行動に対する生徒の動機を高めると推察される。

おわりに

教員は学校生活スキルの育成を明確に意識していなくとも、日々の指導の中で児童生徒の成長発達につながる多様な実践を行っている。本研究は、こうした既存の取組を学校生活スキルという枠組みで整理したものであるが、いずれの取組においても、教員がスキルを育成するという意図を持って実践することが重要である。意図的な実践は、動機付けやスキルの定着に向けた声掛け等、継続的な支援につながると考える。今後は、本研究で整理した取組を基に、学校生活スキルを育むための効果的な実践を検討したい。そして、教員が継続して取り組みやすい実践例を提供し、その実践が不登校の未然防止につながる学校享受感の向上にどの程度寄与するのか、その効果を検証することが今後の課題である。

謝辞

今回の研究におけるアンケート調査に御協力いただいた教員の皆様、そして本研究に多大なる御協力、御助言を賜りました心の教育推進センター所長 秋光 恵子 様（兵庫教育大学副学長）、並びに同主任研究員 井澤 信三 様（同大学院教授）に心から感謝を申し上げます。

文献

- 兵庫県教育委員会（2025）令和6年度兵庫県下の公立学校児童生徒の問題行動・不登校等の状況について（文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」より）。
https://www2.hyogo-c.ed.jp/hpe/uploads/sites/8/2025/10/probe_r06.pdf（2026年1月9日閲覧）
- 古市裕一・玉木弘之（1994）学校生活の楽しさとその規定要因. 岡山大学教育学部, 96, 105-113.
- 本間友巳（2000）中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析. 教育心理学研究, 48（1）, 32-41.
- 飯田順子・石隈利紀（2002）中学生の学校生活スキルに関する研究－学校生活スキル尺度（中学生版）の開発－. 教育心理学研究, 50（2）, 225-236.
- 飯田順子・石隈利紀（2016）中学生の学校生活スキルが学校適応・問題傾向に与える影響: 情動喚起反応を加えたモデルの検討. 筑波大学心理学研究, 51, 97-105.
- 五十嵐哲也（2011）中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連. 教育心理学研究, 59（1）, 64-76.
- 石川芳子（2008）ソーシャルスキルトレーニングの理論と実際. 学校教育相談研究, 18, 26/1-13.
- 茨城県教育研修センター（2004）教育相談に関する研究 学校生活適応のための指導・援助の在り方.
https://www2.center.ibk.ed.jp/contents/kenkyuu/houkoku/pdf/50_soudan.pdf（2026年1月9日閲覧）
- 文部科学省（2025）令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果.
https://www.mext.go.jp/content/20260116-mxt_jidou02-100002753_1_3.pdf（2026年1月9日閲覧）
- 山口豊一・飯田順子・石隈利紀（2004）学校生活スキルに関する研究(3)：学校生活スキル尺度(高校生版)の開発. 日本教育心理学会総会発表論文集, 46, 540.
- 山口豊一・飯田順子・石隈利紀（2005）小学生の学校生活スキルに関する研究－学校生活スキル尺度（小学生版）の開発－. 学校心理学研究, 5（1）, 49-58.
- 山口豊一・奥田奈津子（2017）児童の学校生活スキルと居場所感及び学校適応感に関する研究. 教育実践学研究, 20, 1-11.

表 12 進路決定スキルを育む取組の具体 (小学校)

大カテゴリ	小カテゴリ	取組	取組の実施機会 学習 学校 課外 活動 行事
伝える	小カテゴリ	その行動の意義を伝える	○
		情報を提供する	○
		学習と日常のつながりを伝える	○
		計画を立てさせる	○
		考えを整理させる	○
		考えさせる	○
		将来のために今できることを考えさせる	○
		働くことについて考えさせる	○
		身近な人への思いを考えさせる	○
		現在と将来のつながりに気付かせる	○
価値付ける	その他	社会的一員としての自覚を持たせる	○
		情報収集させる	○
		仕事を体験させる	○
		ペアワークさせる	○
		肯定する	○
		相互評価させる	○
		自己評価と他者評価をさせる	○
		自己評価と他者評価をさせる	○
		自己評価と他者評価をさせる	○
		自己評価と他者評価をさせる	○

※実施機会の項目は、取組の実施が考えられる機会に○を付けている。

表 13 集団活動スキルを育む取組の具体 (小学校)

大カテゴリ	小カテゴリ	取組	取組の実施機会 学習 学校 課外 活動 行事
伝える	小カテゴリ	集団におけるその行動の意義を伝える	○
		集団における楽しい行動を教える	○
		その集団における正しい振舞いを教える	○
		活動計画を立てさせる	○
		より良い集団の在り方を考えさせる	○
		それぞれの役割を決めさせる	○
		考えさせる	○
		グループで話し合いをさせる	○
		相手の立場に立つて気持ちや考えを伝える	○
		自分をコントロールさせる	○
価値付ける	その他	失敗から学ばせる	○
		集団での活動に役立つスキルを学ばせる	○
		自分の役割を持たせる	○
		リレーションを形成させる	○
		自主的・主体的な活動をさせる	○
		異年齢集団で活動させる	○
		褒める	○
		価値付ける	○
		自己評価と他者評価をさせる	○
		自己評価と他者評価をさせる	○

※実施機会の項目は、取組の実施が考えられる機会に○を付けている。

表 22 健康維持スキルを育む取組の具体（中学校）

大カテゴリー	小カテゴリー	取組	取組の実施機会 学習 学校 課外 活動 行事 活動
伝える	健康への意識を高める	食事・睡眠の大切さを伝える	○
		定期的に健康に関する講演会を行う	○
伝える	健康維持の方法を教える	健康チェックカードを活用する	○
		気になる生徒へ声を掛ける	○
		生活チェックでいつもと異なるデータがあれば声を掛ける	○
		無断けを大切にす	○
		リラックスする方法をHR等で実践させる	○
		ストレッチ動画に観る機会を作る	○
		ストレッチについて知らうて実践させる	○
		気になる生徒に声を掛けて改善を促す	○
		起床・運動時間を確認し改善を促す	○
		生活改善をさせる	○
考えさせる	振り返りをさせる	体の健康を10段階で振り返らせる	○
		タブレットで健康状態の振り返らせる	○
体験させる	自分の状態を把握させる	保健委員が毎日健康チェックを行う	○
		保健委員会が毎日健康チェックを行う	○
体験させる	生活習慣チェックをさせる	委員会活動として睡眠時間等をチェックさせる	○
		個人ノートや一日日記等を活用させる	○
価値付ける	体作りをさせる	授業内でトレーニング内容を検討し実践させる	○
		その他	○

※実施機会の項目は、取組の実施が考えられる機会に○を付けている。

表 23 自己学習スキルを育む取組の具体（中学校）

大カテゴリー	小カテゴリー	取組	取組の実施機会 学習 学校 課外 活動 行事 活動
伝える	学習方法を教える	ノートの取り方の例を示す	○
		参事となる学習方法を提示する	○
		苦手教科の学習方法を一緒に考える	○
		学習方法の例を挙げる	○
		どのようにノートを整理すべきか指示する	○
		自主学習ノートの提出を呼びかける	○
		手付けを大切にす	○
		取組を紹介する	○
		学習の目標を設定させる	○
		学習計画を立てさせる	○
考えさせる	取組状況を把握させる	ノートの取組について、生徒の自主学習ノートを提示する	○
		テスト期にテスト勉強計画案を提示させる	○
		テスト勉強計画案の原本を提示して自分から計画を考案させる	○
		苦手教科の勉強方法を一緒に考える	○
		計画表に学習時間・教科・勉強時間等を記載させる	○
		計画表を提出させて、コメント取り計画表に記入させる	○
		計画表をもとに振り返りさせる	○
		計画表をまとめて自主学習ノートに取り直して、学期の終わりに振り返りさせる	○
		振り返りシートを提示させる	○
		補習の課題から自分で選択できるものを選ばす	○
体験させる	学習方法を共有させる	自分で課題を法定するし自分で課題を取り組ませる	○
		長期休業中の課題を自分で選んで取り組ませる	○
		自分の学習方法を他科に伝えさせる	○
		自主学習ノートをコピーして提示させる	○
		放課後に教員を呼び出して生徒が互いに教える合う場を提供させる	○
		タブレット端末で解に計画に取り組みを促す	○
		計画表をもとに計画的に取り組むトレーニングをさせる	○
		スマーレスアップで課題を設ける	○
		学習意欲を激発させる	○
		学習タイムを調整して自分のやりたい勉強をさせる	○
価値付ける	評価する	ノートに自分だけの工夫をしていければ評価する	○
		自主学習ノートをつくらせて自主的に勉強を計画させる	○
		計画表をタブレットで報告させる。物まじりのコメントをさせる	○
		計画表で日々振り返り自己評価させる	○

※実施機会の項目は、取組の実施が考えられる機会に○を付けている。

